

ソフトターゲットにおける テロ対策の考え方



ナスクインターナショナル株式会社 代表取締役 **左近 美佐子**
Misako Sakon

9.11以降テロの手法は、駅や空港、スポーツ観戦やコンサートなどのイベント、ショッピングモールなど不特定多数の人達が集まる場所で、一般市民を巻き込む自爆テロや銃乱射に大幅にシフトしました。すなわち一般人が集まる場所が狙われるケースが増えてきています。

このように多くの人たちの生活空間の事をソフトターゲットといいます。それに対して、ハードターゲットとは、警備や警戒が厳重なために攻撃が困難な人や場所を指します。空港での保安区域や、軍事施設が相当します。

ハードターゲットでは、危険物を確実に検知できることに重点を置いた検査機器が導入されます。しかし、ソフトターゲットでは、むやみにセキュリティを強化すると長い人の列を作ってしまう利便性を損なってしまいます。そこでは安全性と利便性を兼ね備えることが必要です。

この新たな状況に対応するために、ソフトターゲットに対する新たなセキュリティの考え方の確立が緊急の課題と思われれます。

自爆テロは、計画が発覚すれば2度目のチャンスがないため、爆発物を検知される可

能性がある場所は避けます。対象となるエリアをテロリストにとって発覚のリスクがある場所とすれば、テロの確率は減ります。すなわち、対象となるエリアにいる人の全てに検査を受けさせる、あるいは受ける可能性を持たせ、化学センサー、X線、ミリ波等による爆発物の検査を実施する必要があります。また検査による滞留ができた場合は、検査を簡略化してでもスループットを維持し、必要によってはランダムにピックアップすることで、全員が検査を受ける可能性を残すことが重要です。検査を受ける可能性を残す手段として、ポップアップセキュリティー、ピックアップスクリーニングという運用方法が海外では導入されています。

このようにソフトターゲット向けという新たなセキュリティエリアの創出には、ハードターゲットのセキュリティとは全く違う考え方を導入しないとスループットは保てません。薄く、広く、全員をスクリーニングする事が重要で、いかにスループットを保ちながら全員をスクリーニングするか、ソフトターゲットに対する新たなセキュリティの考え方と運用方法が求められています。

公益財団法人総合安全工学研究所 理事・監事

理事長 田村 昌三 東京大学名誉教授
(代表理事)
専務理事 小川 輝 繁 横浜国立大学名誉教授
(執行理事)
常務理事 福 富 洋 志 横浜国立大学名誉教授
放送大学神奈川学習センター所長
常務理事 若 倉 正 英 (国研)産業技術総合研究所客員研究員
(特非)保安力向上センター センター長

理 事 高 木 伸 夫 (有)システム安全研究所所長
理 事 三 宅 淳 巳 横浜国立大学先端科学高等研究院
副高等研究院長・教授
理 事 安 原 洋 東京通信病院病院長
理 事 谷 質 生 日油技研工業株式会社
川越工場 工場長
監 事 河 野 晴 行 (公社)日本煙火協会専務理事
監 事 田 中 保 正 元(一社)日本芳香族工業会専務理事